

345) 愛の輝き

いつもより遅く目覚めて 寝室の窓を開くと
土曜日の午後の陽射しは 静かさに包まれている
ぼくたちの愛の世界は まだ朝のけだるさの中
温もりを求めるように もう少し眠っていたい

カーテンに射しこむ光 ^{まぶ}眩しくて目がくらみそう
おはようの君の微笑み こぼれかけ恥じらいになる
寝化粧を毛布に^{うづ}埋め 背を向けて^{とき}時間が流れた
愛し合いひとつベッドで 目が覚めた昼下がりのこと

唇を重ね合わせて 沈黙の時間がすぎてく
寝乱れの髪をすく手に マニキュアの赤く光って
初めての君の素顔は いつもより輝いていた
ひたすらに愛することで ぼくたちは結ばれていた

この星でふたりは出逢い この星でふたりは生きた
朝が来て目醒めるときも 夜が来て眠るときにも
ぼくたちは一緒に暮らし ぼくたちの時を刻んだ
かたときも離れることなく 誰よりも幸せだった

若かった青春の日々 ぼくたちに嘘はなかった
ぼくの目に昨日のように 鮮やかに記されている
若かった青春の日々 ぼくたちに嘘はなかった
ぼくの目に昨日のように 鮮やかに記されている